

ナポレオンの母

孤蓬生

ナポレオン、ボナパートの母マリア、レチデア、ロモリニは千七百五十年八月廿四日、コルシカ島のアジヤチオに生る、容姿秀麗なりしが故に早く嫁せり、夫はカルロ、ボナパートといひ、マリアと同じく貴族にして、祖先は十六世紀の頃コルシカに移住せる伊太利人なり、二人の中に初めて生れしはジヨセフなり、ジヨセフは初めネーブルスの王となり次にスペイン 轉じて印度の王となれり、マリアの結婚當時はコルシカは戦亂打ち讀みて國中麻の如くに亂れたり、そはコルシカの人民パスカル、バヤリを將としてジエノアより獨立せんと争ひしが故なり、カルロ、ボナパートはバヤリとは親友にして共に愛國の心厚く、ジエノア人と戦ひて勇名を轟かせり、やがてジエノアはコルシカを佛蘭西に譲りしかば佛蘭西は千七百六十八

年五千の兵を送りてコルシカを占領せしむコルシ

二十六

カ島の貴族等は皆海岸遠き山中に入り込みて尙も抵抗を試む、ボナパート亦此中にあり。マリアは此間常に其夫に従ひ具さに其辛苦を共にす、島は遂に佛蘭西の有に歸し亂鎮まり政令布かるゝに及びボナパート夫妻は山より出でアジヤチオに歸る八月十五日、聖母昇天祭（基督の母マリアの天に昇りしと言ふ日を紀念して祝ふなり）の日マリアも衆と共に宮に行きしが式に列せし時、心地悪しくなりしかば急ぎ家に歸り、何の用意もなき折にて、イリアツドの戦（ホーマーの著せる攻城物語にある戦なり）の繪を書ける紙の上に、後に天下を衝動せし大英傑ナポレオンを生み落しけり、其後マリアはマリアアナ、ルシアノ、バオレッタ、ルイギ、アンヌンヂアダ、ギロラナの三男三女を擧げぬ、ボナパート一家は佛蘭西と和し、コルシカ島の知事とも親交をかはし之によりてコルシカの貴族に列せられたり、カルロは千七百八十五年

胃を患ひて死す、時に最も幼なるギロラナは僅かに二ヶ月の嬰兒なり、之等多くの子供を一手に引き受けしは哀なる寡婦マリア也、コルシカ島知事なるマルベエフは資を出してナポレオンをビエンスの兵學校に入らしめぬ、彼は次で巴里に移りて普通學校に學ぶ、長幼の子女を悉く養ひ上ぐるまでは實にマリアは貧の苦境に沈みたりき、千七百九十三年バオリはコルシカの陸軍司令官として送られしが彼素より佛蘭西ジャコピン宗の主義に反對なりしを以て、佛蘭西政府に従ふを肯んぜず英國に通じてコルシカをして英國艦隊に降らしめんとす、時に佛蘭西砲兵大尉なるナポレオンは、會々該島にありしかば、強くバオリの主義に反對し其企を妨げしが事成らず、アジャツチヲを取らんとせしも破れて追放を宣言せられ、ポナバート一家は又遁るゝの止むなきに至れり、ナポレオンは船夫の姿に身を扮して山中に逃れ入りしが土民に捕へられ既に危ふかりしも逃れて遂にカルビに

至れり、マリアは人民の怒を避けんと急ぎに急ぎ夜も日も分たず遁れ走りぬ、幼なき子等の疲れては歩むに堪えぬを背に負ひ前に抱きて慣れぬ道辿る様、實に我が常盤御前にも思ひ合はされぬ、かくして山を越え河を渡り、森を過ぎ野を分けて遂にカルビに着し此所にナポレオンが教父なるギウベヤといふ者に身を寄せぬ、やがてこゝよりマルセイユに渡り、貧困の中に數年を送り、昔富めりし頃知り合へる誰彼に少しづつ、借財しては其日々を送り暮しぬ、後ナポレオンが伊太利の總督に任ぜらるゝやマリアはコルシカに歸れり、時にコルシカは既に佛國に取り戻されたればなり、千七百九十九年十一月九日佛國の内閣崩れてナポレオン總執政官となり國の主權を取るや、一旦衰へし己が家門の繁盛に浴せんとマリアは巴里に趣きて茲に住めり、されど此間マリアは長子ジョセフの家に寓す、彼女はナポレオンが隆々の勢なるを見て彼は實に偉人なりとの感はありしもさて之

を特別に愛するにもあらず、されば多くは長子の家に住し其ローマに赴くや之に従ひて行き、歸るや又共に歸りて、ドウロシエルの邸に住めり、

ルシエン（ルシアナの事）及ジエローム（ギロラナの事）がナポレオンの怒を買ひし事ありしが其時マリアは此二子を保護し之に加擔せしかばナポレオンに冷遇せられたり、後ルシエンはジョーベルトンといふ餘り評判よからぬ者と婚せし科にてナポレオンの怒に觸れローマに居を移すの止むなきに至るやマリアは之に従ひて巴里去を去れり、ナポレオンは母の振舞を心よからず思ひ、後一家一門の者に封爵を分ち與へし折にも母には何等の沙汰もなくして過ぎぬ、されど必ずがに親子の情長へに冷やかなるべきものに非ず、やがて温かき情の湧き出でてや彼は母を巴里に呼びマダムメールの稱號を授け女王として待遇し年八万リール（我が三万圓餘に當る）の俸を給す、されど彼女の収入は年に百萬フランク（三十八萬圓程）に上り

其大部分之を貯蓄し家族中の富少なき者の爲に又不時の用の爲に備へたり、蓋しマリアは此の榮耀榮華の中に何時何時零落の淵に沈まんも圖り難しと思ひたればなるべし、

マリアの屋敷に仕へし人にてアブラントの公爵夫人ユーノーといふ人、其著書にマリアの風彩を畫けり、マリアがマダムメールの稱號を受けし頃は年五十三四位なりしならん、マリアの若き頃は實に二となき美人なりき、マリアナの外は其女皆母に似、花耻かしき姿にて之はシマリアの形見と見られぬ、身の丈は四尺八寸餘り、女には恰合の高さなりき、されど長くるにつれて肩の幅は少しく廣くなり、身の態度しつかとして品高きも、丈は少しく短かく見えたり、手と足はよく揃ひ少さき足は殊に類まれに美しかりき、茲に一つの疵とも言ふべきは右手の食指の筋つまりりて屈縮するを得ざる事なり、骨牌をする時殊に目立ちぬ、此頃齒は未だ一枚も缺けず、其笑顔は見る人をして實

に心魂恍惚たらしむ、容貌秀麗にして生き／＼せ
 る様見るだにすが／＼し、眼は大ならで黒眼がち
 なり、マリアは佛蘭西語を流暢に話し得ざるが爲
 に、己の身分に對して一方ならぬ苦しさを感し、
 人と會しては己を輕蔑しはせずと心遣ひてか甚
 だ内氣なりき、彼女は人を洞察するの明を有し、
 一見して既に其人の何を思ふかを知り、室を去る
 や其將來に起るべき事をよく豫想し得たりとい
 ふ、ナポレオンはマリアを愛せしも母として相應
 はしくかしづかず、爲にマリアは淋しき生涯を送
 りぬ、されど彼女も亦負けぬ氣に皇后其他皇宮の
 人々と相接しかしづかれたしなどは兎の毛も言は
 ず、只孤獨の居に甘んじたり云々」とかく母子の
 中、交情冷かなりしはマリアがルシエンに對する
 偏愛に起因せるならん、而して實にルシエンは才
 量侮るべからざるものありてナポレオンの手に餘
 る人物なりしかば、心私かに之を恐れしならん。
 マリアの一生を瞥見すれば讀者は實に一場の芝居

を見るが如きの感あらん、千七百九十三年に於て
 は追放の身となりて、幼兒を抱きて諸國を逍遙ひ、
 知人を頼りて辛き命を繋ぎ、六年の後には大國の
 皇帝が母と呼ばれ、大困厄の境を出づる十五年に
 して文明諸國は皆己が子女の采封となりぬ、即ち
 一子は佛蘭西皇帝及伊太利王となり、一子は西班
 牙及印度の王位に即き、一子は和蘭に君臨し尙ほ
 一子はウエスト、フアリアに王たり、而して一女
 はシシリーの女王となり一女はタスカニーの大公
 夫人となり、一女は一羅馬貴族の夫人となりぬ。
 而して尙ほ五年の後には、此榮華、朝に輝く露の
 如く、果なき夢と消え失せて、さしも旭と照り添
 ひしマリア一家は、又も逐はるゝ身となりて、見
 るも痛ましき流浪の運命を嘆きぬ。
 千八百十四年ボナバート一家流浪の時マリアは弟
 フエッシュと共にローマに逃れ豫ねての貯蓄にて然
 るべき月日を暮し、一家の誰彼、同じ窮境に在る
 者をも助けぬ、彼女の最も親しく交はりしはハミ

ルトンの公にして此人を二なく厚遇せり、千八百二十一年、ナポレオン、セントヘレナに死すとの報至るやマリア憂愁措かず、千八百三十年の革命後病に罹り、次第にいたく重りしかば一家の者枕邊に寄り集まりぬ、彼女の弟、子女嫁など彼女が何か低聲に祈れる様を見て、今死なんと思ふ胸の内にてせまる憂き悲しみをよく知るものから、ともく涙に咽ぶ、モントフォード侯なるジェロームは故ありて此座に連るを後れぬ。漸く用果て急ぎ母を訪ふ、静かに病床に近づき、母上よ我なりジェロームなり、聞き給ふや、と問へば、マリアは僅かに首肯さぬ、かくてジェロームは都にて聞きたる噂に此度人民に利ある勅令發せられ、ナポレオンの像も作らるべき由なるを告げけるに、口に答はし兼ねたれど、病人は心のうち、言ひ知らぬ、思に充たされしにや、手を合せ眼を閉ぢて祈を捧げぬ、見れば頬には玉なす涙傳はれり、されどこは嬉し涙なりき、之より少しく病退き遂には

床を離るゝに至りぬ。母の優しき此涙、セントヘレナに洒されし冷たき骨にも其誠心を感じしならん。

後益々身体衰へ、女バウレットが別邸にて或時ふと轉びしより殊に身体を自由を失ひ日も夜も常に寝臺の上に時を過しぬ。當時眼も亦用を爲さず、常に彼の女に侍する者、毎日新紙を讀み聞かせ、又は日々の出來事を語れば老マリアは之を聞きて或は我子上を思ひ、或は昔を思ひ、見えぬ眼にナポレオンの姿を偲びつなどして、想像のまばろしにかしつかれつゝ其日を送りぬ、かくするうちに力と頼む我子等は一人死に二人逝くの計に接し老の身に更に心細くなりまさるを、殊に寵深かかりしジェローム夫人の死せしをさへてより勢頓に衰へ、千八百三十六年一月廿七日急に昏睡の状に陥る、後少しく恢復せしが二月一日に至り更に冒され 大英雄ナポレオンの母遂に醒めざるの人となりぬ。